

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18310160

研究課題名（和文）東南アジア大陸部における土地利用変化のメカニズム－フィールドワークとRSの結合－

研究課題名（英文）Land Use Dynamics of Mainland Southeast Asia: Combining Field Works with RS

研究代表者

河野 泰之（KONO YASUYUKI）

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号：80183804

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア・土地利用・リモートセンシング

1. 研究計画の概要

本研究は、東南アジア大陸部を対象として、土地をめぐる環境保全と貧困削減の二律背反という現状を、より長期的な土地利用のダイナミズムに位置づけることにより、環境保全と貧困削減が本来的にもつ相補的な関係の再構築を目指す。そのために、ミクロなレベル（例えば村レベル）を対象として、長期的な土地利用変化のパターンを明らかにしてその要因を分析するとともに、地域住民による生活・生業実践としての土地利用と環境保全や貧困削減などの政策プログラムが誘導しようとしている土地利用との整合性を検討する。

2. 研究の進捗状況

これまでに、カンボジア、ラオス、ベトナムを対象として、現地調査を実施するとともに、空中写真や高精細人工衛星画像を収集・分析し、村落レベルでの長期的な土地利用変化のパターンを抽出した。その結果を、現地調査

や文献資料から明らかにした土地利用の現状や履歴、社会経済史に基づいて分析することにより、長期的な土地利用動態を明らかにするとともに、それを対象村落間で比較することにより、長期的な土地利用変化のメカニズムを検討した。これまでの研究成果は以下の2点に集約することができる。

(1) ミクロなレベルの土地利用は、戦争や政治体制・経済システムの転換などの国レベルの制度・政策に必ずしも支配されていない。それよりも、東南アジア大陸部というような、より大きな地域（region）レベルにおける資本主義・市場経済の浸透や統治制度の近代化などのより大きな社会経済変動の影響を強く受ける。これは地域住民の生活・生業転換が、一国単位の政治的なイベントではなく、地域住民レベルで共有される時代性に支配されていることを示唆している。時代性を共有するメカニズムを可視化することは困難だが、きわめて多様なものと考えられる。そのなかで、いわゆるマーケット・メカニズムや政府による開発プログラムは、一つのメカ

ニズムでしかない。それらに加えて、個々の人々の経験、コミュニケーションや相互観察が時代性を形成している。

(2) 過去数十年において、環境保全と貧困削減の調和という観点から最も意味のある生活・生業転換は、農民が自給を放棄し始めたことである。自給農業からの離脱は、農民に作物選択や職業選択の自由をもたらすので、資源利用の観点からは資源競合を緩和するので両者の調和を容易にするが、資源管理主体の不明瞭化やローカルな資源管理の弱体化を招いている可能性が大きい。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

当初の計画通り、昨年度までにデータ収集と分析はほぼ終了した。最終年度である今年度は成果のとりまとめが主たる活動内容である。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの研究成果をとりまとめて、学術雑誌などとして公表する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. 河野泰之、落合雪野、横山智. 2008. 「ラオスをとらえる視点」, 横山智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』, めこん, pp. 13-44, 査読無
2. 河野泰之. 2008. 「動かない森、変転する森ーラオスの森林の 100 年誌ー」, 秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森に何が起きているかー熱帯雨林とモンスー

ン林からの報告』, 人文書院, pp. 23-44, 査読無

3. 河野泰之. 2008. 「熱帯林を保全するメカニズム」, 林隆久編『森を取り戻すために』, 青雲社, pp. 454-64, 査読無
4. 縄田栄治. 2007. 「東南アジア大陸部における農業・土地利用動態に関する研究」, 『熱帯農業』 51(5), pp. 250-253, 査読有

[図書] (計 1 件)

1. 秋道智彌 (監修)、河野泰之 (責任編集). 2008. 『論集モンスーンアジアの生態史 第 1 巻 生業の生態史』, 弘文堂, 227 p.